

「女性として生きる不安」を越えて

—— 女性の自己実現のための課題をめぐって ——

伊 藤 雅 子 (南山短期大学教授)

1. はじめに
2. 今日の女性をとりまく不安
3. 女性学の課題
4. 「女性として生きる不安」を越えるために
5. むすび

1. はじめに

かつての時代、母となり子を育て上げることが、多くの女性の唯一の自己実現であった。医療水準や一般的衛生状態が低く、乳幼児死亡率が高かった時代においては一人でも多くの子供を産むことは家族・部族・社会の存続のためには絶対必要なことであったからである。また、平均寿命も50歳そこそこであれば出産と多くの子どもの養育で生きることは精一杯であったと思われる。母となること自体が女性の自己実現であることは、今日の社会においては全く当てはまらないとは言いきれない。母となることは多くの女性にとってはかけがえのない体験であって、彼女達は出産・育児を通して成熟し、自己実現に近づくことも事実である。

しかし、いまや女性にとって妊娠は妻や夫婦の間で選択されるものとして恣意に任せられ、多くある選択肢の一つとなったことが、男性とは全く異なる意味で女性の自己実現がとりあげられるようになった基本的理由であろう。そして、同時にこの状況が女性達に自分はどう生きればよいのだろうかという疑問を投げかけ、そのことが女性特有の不安の原因ともなっていると思われる。

ここでは、自己実現と対峙するこのような女性特有の不安「アイデンティティ・クライシス」の問題に焦点をあてて論じ、ついでそれを乗り越える道と女性にとっての真の自己実現とは何かを模索してみたい。

2. 今日の女性をとりまく不安

「自己実現」という語は心理学辞典によれば人間の「生活体の基本的な動因として考えられ、自己を拡大し、分化し、自律的になること、より成熟すること」を指している。これは「人間」の自己実現であって、「人間の」といったときには男女の別は無く、実際に男女の差異よりはむしろ個人の差異の方が大きいと考えた方が妥当であろう。しかし自己実現を考えてみると今日の社会ではさきに述べたような理由から女性には男性と異なる困難があるように思われる。この状況は、表れ方こそ異なれ日本だけの問題ではなく、先進国・開発途上国を問わず世界の多くの国々で問題となっていることである。国連の場で男女差別撤廃条約が検討・採択されたのも、そのことの表れと見てよいであろう。

わが国においては戦後、民主憲法が個人の基本的人権と平等をうたいあげ、また、1979年には国連で女子差別撤廃条約が採択されてのち日本も1985年にこれに批准して以来、女性の生き方は大きくかわってきた。教育の場面では夫のため、子どものためにのみ生きるいわゆる「良妻賢母教育」は「人間教育」にとってかわられ、1994年度からはそれまでは女子の「聖域」とされてきた家庭科も男女共習となる。家庭においても性別役割分業が見直され、夫の家事・育児への参加が意味あることとして位置づけられるようになった。労働の場では、男女雇用機会均等法が施行され、賃金や昇格でまだまだ問題があるとはいえ、様々な場で女性の活躍が期待されるようになってきている。

また社会全体の流れのなかでは、平均寿命の延長と少産による女性のライフサイクルの変化と産業構造の変化の中で女性が子育てをして一生を終えることは完全に過去の現象となり、労働や学習の場で多くの女性の姿がみられるようになった。

このような社会現象の面での変化がさまざま、社会を構成するすべての個人の意識の変化をもたらすとは到底考えられない。むしろ、社会全体が動いている中で取り残される側面や個人の意識のずれが様々な問題を投げかけているのを見逃すわけにはいかない。自分の生き方に自信を無くし、いいようのない不安から、どうすればよいのかわからなくなる、いわゆる「アイデンティティ・クライシス」の問題がそれである。そして、今日生きる女性の殆どがいろいろな時期に、さまざまな状況の中でこのような不安を経験するようである。

ヘレン・A. ドウローシスは著書「女性の不安、ウーマン・パワーとしての不安エネルギー活用法」(Woman and Anxiety)の序文のなかで女性の不安について次のように述べている。

「近年になって女性は大きく変化しており、中には能力以上の速度で変化することを強いられているように感じている人々も居ますし、この変化で混乱し動転してしまっている人々もみられます。そのため、十数年あまり、女性達は以前よりも大きな不安を分かち持ってきたと言えるでしょう。どんな状況下であれ、移行、変遷とは、不安を催すものなのです。近年の変化は、女性たちの生活全般に及び、その役割、態度、価値感、期待、行動、目標の全てが、混乱のつぼになげこまれています。」(ドウロース、p.v)

ドウロース はどんな状況下にあっても、移行、変遷が不安をよび、役割、態度、価値観、期待、行動、目標のすべてが混乱のつぼになげこまれることを指摘しているが、この状況をこれまでの多くの女性達の生きる場であった家族についてみると、閉鎖構造から開放構造への移行としてとらえることができるだろう。ここでいう閉鎖構造とは「遂行すべき役割体系がきちんときめられていて、個人は自己の欲求をそれに合わせていかねばならないような構造」のことであり、これに対して開放構造では、「役割体系も伝統も規範もあらかじめきまっておらず、若夫婦が協力して新しいものをつくりあげていかねばならない」ものをさしている。従って閉鎖構造では個々の具体的・固定的な役割遂行がきちんと決められており当事者の意志とは関わりなく遂行されねばならないことから、個人の内側で内的葛藤から不自由さを経験し、束縛感を味わうことになる。これにに対し、開放構造ではきわめて一般的・抽象的な機能遂行のみが要求されており、それらの具体的遂行方法については夫と妻との個人的価値観、期待や、それぞれの育った定位家族のイメージなどの食い違いから外的葛藤が生じやすいのである。「閉鎖構造ではすべてが制度化・自動化・特殊化されているが、開放構造ではすべてが進歩的・知的・探索的であるという意味では、後者のほうが人間をより自由にする。しかし同時に夫婦間の対人的フラストレーションを増大させ、アイデンティティの確立を困難にさせる。」(青井, p. 110) 夫も妻もたえず「自分はこれでよいのだろうか」と自らに問い続けることになるだろう。

閉鎖から開放へのうごきは、さきにあげたヘレン・ドウロースも指摘しているように社会的・経済的・技術的変化の加速化によって生ずるだろう。今日、日本の家族は確実に直系家族から夫婦家族へと移行しており、その過渡期に程度の差はあるにしても閉鎖構造から開放構造への変遷が典型的にみられるようである。そのなかにあって女性達は、個人のパーソナリティの成熟のための緊張や葛藤の問題だけでなく、家族をめぐる閉鎖構造から開放構造への変化と、それにともなう「アイデンティティ拡散」の問題と真正面からぶつかることになる。何年か前に「妻達の思秋期」という言葉がジャーナリズムを賑わせたことがあったが、ライフサイクルが変化し、子育て後、長期間にわたって生きることが可能になった女性達が、その時期を如何に生きるかに悩んだすえ

とられる不定愁訴の表現とし問題のひろがりを示す言葉であった。

それでは、このアイデンティティの拡散は女性達にどのような影響を与えているのであろうか。ここで心理学的な洞察を援用してみよう。ヘレン・ドゥロースは人間という組織体は健全な自己成長の力を内在させているものとしたネオ・フロイディアンのカレン・ホーナイク学派（註1）の有力なメンバーであった。ホーナイク学派によれば、従来、女性的特徴とされていたものは、人間の成長にとって外的監視機構である社会文化的条件によって規定されたものに過ぎないのであって、いわゆる“女らしさ”にみられるいじけたマゾヒスティックな態度は、それ自体神経症的なものであるとしている。そして、女性達は他者、特に男性に依存し、目だたなくふるまうことで人生の満足と安心を得ようと試みるのであるが、ホーナイクは社会全体がこうした人生を女性に押しつけていることこそが問題であるとした。多くの女性は成長過程で、その押しつけられているものを外的な監視機構「……すべき」という形で自己の内に取り込んでしまい、自律的な自己実現が阻害されたまま人生を終わってしまうことを彼女は警告している。ホーナイク派のドゥロースはこのような神経症的な考え方や、自己の中に取り込んでしまった社会文化的条件が引き起こす葛藤から離れて真の自分に返り、本来の自己を成長させるための自助プログラムを提唱している。

アイデンティティ拡散の問題は近年、男-女の境界があいまいになってきたこととも関係があるようだ。人は生物的に男か女に生まれる。しかしこの生物としての男女の差は、多くの場合、社会的・文化的意味の違いが付け加わって示され、いわゆる、「男らしさ」「女らしさ」といわれているものである。機械化や省力化の進んだ今日の社会においては、筋力や体力を必要とする機会が少なくなり、他方、男女の平等化が進んでいるため体力や筋力での男性優位の意味は減少している。そしてこの境界があいまいになってきていることは、女性にとっても男性にとっても、河合隼雄氏もいうように「いろんな成功の可能性が広がった代わりに、境界のはざまにこれまで思いもかけなかった失敗や転落の可能性が増えた」（1992年2月1日、中日新聞）ことになる。

3. 女性学の課題

「女性学」は1960年代にアメリカの女性解放運動の高まりとともにアメリカの主に女子大学において開講されるようになった。ここ20年ほどの間に多くのアメリカの女子大学が閉鎖を余儀なくされたり共学に踏み切る中で、女子大学の生き残りの条件の一つが「充実した女性学を開講していること」であったのは興味深く、女性学が女性達を啓蒙し、リーダーシップの育成に有意義であることを物語っている。このことに関しての日本の現状についてみると、1990年には251大学（全大学・短大の23%）で465科目が開講されており、生涯の生き方について考えさせる授業としてその意義を認められている。

最近では共学の大学で男性も受講、自分の性別役割意識について再検討する機会ともなっているようである。また、女性学の学びの場は高等教育機関だけではなく、都市部を中心とした社会教育、あるいは生涯学習機関でも多くの女性学関係の講座を開設しており、文部省も生涯学習促進事業（註2）の中に女性学関連の講座を開設することをすすめている。

では女性学の中心的課題は何であろうか。さきに述べたアメリカの女性解放運動がきっかけとなった女性学は女性が差別されているという認識に立ち、女性を取り巻く社会状況を変革するための手段であると、男性に対する敵対心や対立感をバネに、運動や研究をおこなっている過激なグループもあれば、男女間の性差の存在を認め、それを積極的に生かすことを主張しながら、女性をとりまく現状を分析検討し、その結果を女性に対する差別をとりぞくことにつなげていこうとする幅広い地道な学習も行なわれている。女性学の課題は自分が女性であることをしっかり認識し、自分を含めた女性のおかれた状況、とくに自分の自立や成長をはばんでいるものを明らかにして行くことであろう。1991年から93年にかけて、名古屋市教育委員会との共催で南山短期大学が実施した「なごや女性カレッジ」が「女性の自己理解と自己変革にむけて」をテーマとしたのもこの後者の立場に立ってのものであった。また「女性学」という科目のねらいは女性である自分をより深く理解し確認するとともに、女性をめぐるさまざまな社会通念を洗い直し、自分の生き方の見通しをたてるのを援助することである。

女性である自分をより深く理解することの第一歩は自分自身の中で『セックス』と『ジェンダー』をはっきり識別することから始められる。すでによく知られているように『セックス』は人間の男女の生物学的差異の側面で、女性の場合は出産・授乳に直接つながる特徴を指している。しかし、やっかいなのは、この側面が女性の生活にたち現われるのは限られた期間だけであって、多くの場合には人間の性差の文化的・社会的側面である『ジェンダー』が、あたかも変えることのできない根源的性差であるごとく生活全体を規定していることである。私達の文化の中では、女性は幼少時より「女らしく」、「ひかえめで」、「自己主張することなく」、「男に従うのが当然」とされているが、これらの特徴は生来女性に備わっているものであると言うよりは、成長の過程で、また教育を受ける中で学びとられたものといえよう。さきに挙げたカレン・ホーナインも女性達が社会的規制を自分の中に取り込んでしまい、そのことが自律的自己実現を阻害していることを指摘した。この社会文化的規制は時代の変遷につれて緩やかに変わり、また場所が変わることによって多様な表われ方を示している。また歴史の表面に出てこなかった女性の生き方を掘り起こすことによって主流にある社会文化的規範とは異なる生き方も可能であったことを知ることが出来るであろう。従って歴史の流れの中で様々な女性の生き方を探ったり、自分とは異なる文化や価値観の中で育った女性の生き方に触れることも意味が

あり、そのことを通して本当の自分はどの様に生き、何をしたいと思っているのか自問しながら「セックス」と「ジェンダー」を識別することが出来るようになると思われる。

さいわいなことに、今日の日本社会においてはタテマエの上で個人の尊厳が尊重され、性的・人種的・宗教的差別は少なくなった。女性に対するあらゆる差別を撤廃しようとした1975年から1985年にかけての「国際婦人年」の影響もあって、女性は法的にも教育的にもまた労働の面でも差別されることは大幅に減ってきている。高等教育の面で、四年制大学と短期大学をあわせた進学率は男性が35.8%であるのに対し女性は36.8%とやや高く、女性は短期大学中心であるとはいえ、専攻分野なども家政科中心であった以前とは比較にならないくらいの広がりを見せている。まだまだ色々な問題を残しながらも男女雇用機会均等法や育児休業法は家庭以外の道に自分の生き甲斐を見つけようとする女性達には有利な状況が少しずつではあるが作られつつあるのが現状といえよう。

平成5年8月9日の中日新聞生活欄には「女性世帯主、離婚や非婚が増加傾向、男女平等観に立つ社会へ」という見出しと「保守的な若者の結婚観－専業主婦にあこがれる」という一見相対立するように見受けられる見出しとが、並んで掲載された。前者は、伝統的・家父長的家族像を揺るがしかねない家族の多様化を示唆し、後者はそれに反して女性の社会参加がマイナス要素としてとらえられ伝統的家庭への回帰の傾向を暗示しているように見受けられた。しかし、意識の保守化と受け取られかねない若い女性の“家庭回帰現象”の中身はかつてのものとは比較にならないくらい異なっていて、長期的な社会変化の1つの方向は男女平等観に立った社会へと向けられていることは確かで、この2つの記事の根底には多様なライフスタイルを容認する今日の社会状況の流れがあるとみることが出来るであろう。たしかに女性にとって今日の社会は長寿・少産と家事の省力化などにより、ひと昔前までは“夢”であったゆとりある生き方に手が届くようになってきた。性別役割分業観も確実に変わってきている。

しかし、一方においては生き方の様々な可能性が見えてくると、それらの可能性の中から自分にとってふさわしいものを選ぶに当たり「自分とは一体何者だろう」、「自分は何をしたいのだろうか」といった疑問を自分自身に投げかけることにもなる。しかし、これまで受けてきた教育の枠組みの中でその問いに答えることは想像以上にむずかしく、“私”を主語にした主張ができない、いわゆるアイデンティティ・クライシスと呼ばれるものに女性達が悩まされることも見逃すわけにはいかない。

1991年から1992年にかけて、アメリカにおいて女性による2冊の本が相次いでベストセラーとなった。スーザン・ファルディーによる「バックラッシュ (Backlash)」とグロリア・スタイナムによる「内からの変革 (Revolution From Within)」である。この2冊はそのいずれもが外へ外へと働きかける女

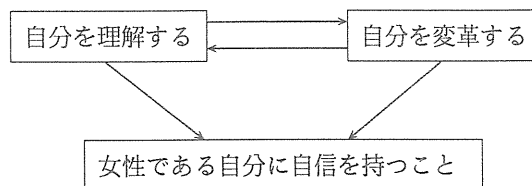
性解放運動への反省と言う視点からかかれたものであることは興味深い。フェルディーがいくつかの統計的資料を駆使して女性解放運動からの逆戻り(Backlash)を論じているのに対し、グロリア・スタインは「自分に自信を持つために」(A Book of Self-Esteem)と副題をつけた「内からの変革」(Revolution From Within)と題する著書で、自己を知り自分を信じることから可能になる自己変革の方法を述べている。スタインはこの著書の中で人は自分が何者であるか、またどうすれば自分自身を信頼することが出来るかに答えようとしている。

確かに今日の少なくとも工業化された社会における女性達は以前とは比較にならない恵まれた物質的状况の中で多様な生き方を選択することが可能になってきた。能力を持ち、訓練された多くの女性達が文字通り社会の様々な分野に進出している。これまで人口の半分を占めながら声にならなかった女性達が声を上げることにより人間の生きている社会全体に新たな可能性が開かれようとしている。しかし、アメリカの女性達の活躍を阻害している壁、いわゆる「ガラスの天井」ということばに示された状況、表面的に改善されたように見受けられる条件の背後には隠された多くの様々な障害があることも否定することは出来ないであろう。そしておそらく最大の障害はジェンダーに影響された女性の自分自身の中の壁であるともいえる。

4. 「女性として生きる不安」を越えるために

女性達が自分の中の、そして周りにある様々な障害を取り除き、自分の可能性に気づき伸ばしていくならば、過去には前例の無い未知の世界が、女性たちだけでなく、男女を含めた人類の前に開けていくであろう。また、女性にとってはそのことが自己実現への第一歩となるはずである。

この女性としての意識を高めるための女性学は、次に挙げる3本の柱から成り立っている。



この3本の柱をめぐって展開される女性学はどのようなものであろうか。それはまず、自己理解と自己変革のきっかけを掴むことが中心となり、それらのことが結果的に自分に自信を持つこと(セルフ・エスティーム)(註3)の素地となるものである。そして自己実現はこれらの3つの柱の上に可能となるように

思われる。

私がいくつかの女子大学で行なった女性学や、一般社会人女性を対象として名古屋市教育委員会と南山短期大学人間関係科共催で3年間にわたって開講された「なごや女性カレッジ」(註2)等でこの3本の柱をめぐって実施した学習の内から、有効と思われるものをいくつか紹介してみたい。

(1) 体験学習方式による学習 —— 女性とは何かを知識として学ぶことも無意味ではないが、先ず何よりも自分は女性として何を大切に、どんな偏見や価値観をもち、どう人と関わっているかを実際の体験の中から拾い上げ、分析し、自分の次の行動に結びつけていくような学習でなければならない。南山短期大学人間関係科の専門科目の多くが体験学習方式によって自己を理解し、変革に向かうよう方向付けられているので、学生達には女性学と結びつけやすい科目に恵まれていることになる。

(2) グループ学習 —— 個人で学ぶだけでなく、グループでの学習、話し合いとフィードバックが大切である。一つの事柄に様々な見解、意見、答えがあることを体験的に気づいて行くために、自分の考えを言葉にして他者に伝え、他者の反応を受け取っていく過程を通して自分の価値観・考え方、感情を再吟味するが、このことが自分を知る為の第一歩である。

(3) 女性性と男性性の再点検 —— 「独立心がつよい、忠実である、常識的である」といったような一般的に男性的、女性的、また中立的とおもわれている言葉を20組60語用意し、自分がどうであるかを7段階スケールで点数を与えるチェックリストがしばしば用いられる。それを特性別に集計し、自分の男性度、女性度を点数化してみる。この女性度・男性度は絶対的なものではないことに注意しながらも、女性度・男性度の割合、結果についての自分の感想、用いられた言葉に対する感想などを交えて2～3人で話しあう。チェックリストの記入から話し合いまでの過程で自分について気づいたことなどを記録する。

また、ここでとりあげられた60の言葉の日常生活の中での使われ方を吟味したり、また次にあげる「自分史作り」の記述において、自分がそれらをどう用いているか検討してみることも意味がある。

(4) 女性としての自分史作り —— 出生時から現在までの個人史をいくつかの時期に区切り、両親や家族のしつけの影響、自分に対して言われたこと、周囲の期待、自分の思い出やこうありたいと思ったこと等を書き出してみる。特に「女の子だから……」として規制されたことや、「女として……」と社会文化的規制と自分はどのように関わり、また自分の中に取り込んだかなどを丁寧に追ってみる。

(5) 価値観の明確化

- a. コンセンサスの実習 —— 極限状態におかれた男女数人の言動についての物語をよんで、まず個人で自分は好ましくないと思う人物から順位をつけ、そのあとで数人のグループで話し合いながらグループ・コンセンサス（一致）を導き出す実習で、自分の考え方、こだわり、価値観が明確になる。
- b. 価値明確化のチェック・リストを用いて —— 生きていく中で家族・金銭・芸術・奉仕等どの領域に自分は価値をおいているか点数化し、プロフィールとして描き出せるものを各自記入し、でてきたものを結果をもとに2～3人で話し合う。

(6) さわやかな自己主張のための実習 —— いくつかの状況に対し、攻撃的・自己主張的・受身的の3通りの応答を準備し、自分は多くの場合どう反応するか指摘しながら、3通りの応答の違いを明確にする。その後、さわやかな自己主張のための要件について話し合う。

(7) 異なる時代や文化、また境遇の中に生きた、また生きている女性達の生きざまを出来るだけ一般化することなく、生のまま触れてみることは、今の女性自身の生き方にさまざまな形で光を当てることになるであろう。さまざまな女性に直接インタビューをして相手の価値観、生き方をしっかりききとりながら自分の生き方とすり合わせることは大切である。また資料として使われるものは多岐にわたるが、いずれの場合も読んでからグループで感想を述べあい自分の生き方との接点を探る検討が重要である。

(8) 学習の過程で学習ジャーナルをつける —— 自己理解と自己変革をめざす学習においては、個人学習であっても、グループ学習であっても、自分や他者の体験を観察、内省することは大切であり、そのために体験を客観的に記述し、次の分析や仮説化の手がかりとする手続きが必要である。自分の可能性を探り、自分の内に生起する感情を把握するために、自分のために内的フィードバックシステムを維持するために、このジャーナルは意味があると思われる。
(津村、p.25～27)

ここに(1)から(8)までに挙げられた方法は、色々なレベルのものがああり、それぞれの可能な時間や状況に応じて組合せ、企画することが望ましい。カリキュラムの実際例については資料を参照されたい。

5. むすび

私達女性はどうすればより豊かな充実感をもって生活することができるのだ

ろうか。この問いに答えるために、この小論では今日の女性の置かれた現状と課題を、女性の不安とアイデンティティ・クライシスを手がかりに明らかにしようとして試みたつもりである。「女性として生きる不安」のりこえ、自己実現に至る道として、むすびでは(1)いのちへの感受性の再評価と(2)女性学の学習の2つを挙げておきたい。

(1)確かに女性達は男性とは異なる課題をかかえているが、そのことを再確認する必要がある。それは言うまでもなく女性と男性の生物学的な差異に根ざしている。女性は自分の胎内に生命を宿し育むように創られているが、そのことは、女性に生命に対する直感をも備えさせている。様々な問題に対しての女性の直感的な発言は、これまでややもすると理論的ではないとの理由で軽くみられてきたが、戦い殺し合うことに反発し、身をもって生命を守ろうとする女性達の生命に関わる直感、そのまま女性の課題ともなってきた。生物学的に母となることでの自己実現はこの小論の中でもたびたび論じられたように今日大きく変化してきている。しかしそのことは「いのち育むもの」としての女性の存在意義が少なくなったのではなく、むしろこれまでとは異なったかたちで存在を主張していかねばならないことを示している。

例えば「エコ・フェミニズム」という言葉が用いられるように環境問題に取り組む女性運動が盛んである。自然は母性により密接なつながりがあるから、というのが理由にあげられる。ある英紙の調査によると、女性の68%が環境問題に関心があるのに、男性は51%（1993年9月19日読売新聞朝刊）に落ちるといわれている。女性が世の中にプロテストするテーマが80年代は反核運動であり、今は環境問題になったということもいわれている。これらの運動から、時には過激であったり、地に足がついていなかったり、唐突であったりしながらも、女性達のはっきり自分の主張をしながら様々な問題に取り組んでいくことができる可能性を示唆している。

先進諸国において人々は物質的豊かさと精神的貧困のきびしい矛盾に悩まされているが、その豊かさは科学的実証主義に裏づけされた技術万能主義や管理主義の結果に他ならない。また、今私達が目前にしている環境や貧困のような様々な問題の解決には従来の整然とした分析理論だけでは解決は難しくなっている。さらに生産とか効率といったものとは少しかけ離れた足元の日常生活そのものを大切に目直していくことが、これらの問題を解決する鍵であろう。このように考えると日々の生活に足を地につけて生きてきた女性の視点が、これからは配慮に満ちたものとして、地球の未来を考える上で欠くことのできないものとなるであろう。女性達は“生活そのものに真理を引き入れ”（D. A. ギャラガー、1983）ていく能力を備えているとも言える。

(2)女性学や女性の意識化の教育は、女性達が自分は何者であるか、生きて行くときに何を大切に、何を選び取っていくのか、自分は何を主張しようとしているのかを明確にしながら、人間的に成長することを目指している。そのこ

とは、おそらく女性としての自己実現ということが出来るかも知れない。

しかし、一連の学習過程をこなしても、そのことはすぐさま自己実現とはいえない。自分を深く知り、その自分の長所ばかりでなく、欠点や眼界もすべてふくめて受容する、言い換えるならばありのままの自己を謙虚に受けとめることから自己実現が始まるように思える。

「自己実現」という考え方は、「成長」とか「発展」といったようなことがある限界にきたと感じられた状況の中で行きつく考え方もかもしれない。そこには目に見えるような変化にはもはや限界があるにも拘らず、それまでの人間的努力や改善の実感があり、またそこでのある種の満足感がかなり明確に感じられることが起こって来るであろう。そのようなかなり広範囲な、そして個人によって内容的にさまざまなものを総称して表現する言葉として有効なのかもしれない。

また、自分の能力と限界についての健康的な認識と、その自分が「生かされている存在である」とする謙虚さの上に自己実現は達成されるのだろう。だから、一人一人の人間が「死」を迎えた瞬間に真の意味での自己実現が可能なのかも知れない。

世間的な意味で成功したと見受けられる人でも、本人が自分は自己実現できたと思っているかどうかはわからない。むしろ、そのような人に限って成功の裏のむなしさを感じているのかもしれないし、そのような成功が自分の死とともに喪失してしまう事への恐怖を成功が大きければ大きいだけ深刻に感じるのかも知れない。

真の意味で自己発見することが自己実現であろう。ゲール・シーヒイの言葉を借りるならば人は自己発見の過程で時には苦悩と落胆の内に様々な「分解」の時期を通過するが、その過程で得る最大の報酬の一つは、自分自身を倫理的・道徳的な見地から、しかも他人が持っている標準や規格とは全然独立して、容認するようになることだろう。自分の両親がもし違う人間だったらよかったのに、という願望を放棄すること、いろいろなライフ・スタイルを試してみ、遂に自分のものとして守る価値があるものを発見し、身につける時点に至ったことを通じて、エリクソンのいう『統合された人間』になることを達成したのだ。エリクソンがこの言葉で意味しているのは『人間が成人としての成長段階の最後に達したこと』であり、そこでは自身の人生を祝福出来るのだ。(シーヒイ、1978,II p.320)と。

女性の場合、自分が直面している不安を乗り越え、この「むすび」で挙げられた第1の側面の上に第2の側面を重ね合わせることにより、豊かな人間としての統合、自己実現が可能となるであろう。それは母となる喜びと、「救い」の大事業に参加する驚異とを「マグニフィカト」の詩でうたいあげた聖母マリアにならう生き方であるように感じている。

註

(1)カレン・ホーナィ(1885~1952)は「自己実現の闘い—神経症と人間的成長」という著書を公にした。彼女は「理想化された自己」と現実の「真の自己」との葛藤を乗り越えるプロセスが自己実現につながるとしている。

(2)ウィメンズ・ライフロング・カレッジと女性国際交流フェスティバルの2事業から構成されている文部省の「女性の生涯学習促進事業」の一つであって、ウィメンズ・ライフロング・カレッジは、「都道府県・指定都市が大学・短期大学等の高等教育機関と協力・提携して、大学等の持つ人的・物的な教育機能を活用し、女性の多様化・高度化した学習要求に即応したウィメンズ・ライフロング・カレッジを開設し、女性の生涯学習の推進とリーダー等の養成をはかるものであること」とされている。名古屋市教育委員会に協力して1991年から1993年まで「なごや女性カレッジ」が南山短期大学で開催された。

(3)「セルフ・エスティーム」という言葉は最近、心理学の分野で用いられるようになった。参考文献で挙げた遠藤氏によればセルフ・エスティームとは「人が持っている自尊心(self-respect)、自己受容(self-acceptance)などを含め、自分自身についての感じ方をさしている。自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情である。」また遠藤氏が男性性・女性性について次のように書き加えているのも興味深い。「最高のセルフ・エスティームの所有者は、男性性と女性性(情緒的反応性と自己及び他者への感受性)の両者の典型的な特徴を示すので、性役割の面で両性的(androgyneous)であるといえることである。反対に、セルフ・エスティームの低い人は、性役割の未分化な—男性的特徴も女性的特徴もほとんどもっていない人であることも明らかにされている。」

参考文献

- 青井 和夫 家族とはなにか , 講談社現代新書 1974年
- ヘレン・A・ドウローシス (斎藤 学訳) 女性の不安 ウーマン・パワーとしての不安エネルギー活用法 , 誠信書房 昭和58年
- 遠藤辰雄・井上洋治・蘭千寿編 セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求, ナカニシヤ出版 1992年
- ドナルド A. ギャラガー他編 (梅村敏郎訳) 人間の教育、ジャック・マリタンの教育哲学, 九州大学出版会 1983年
- 井上輝子・江原由美子編 女性のデータブック , 有斐閣 1991年
- 小林 司 「生きがい」とは何か、自己実現へのみち, 日本放送出版協会 1989年
- 斎藤学・波田あい子 女らしさの病い—臨床精神医学と女性論, 誠信書房 昭和61年
- ゲール・シーヒイ (深沢道子訳) 人生の危機 パッセージ I,II , プレジデント社 1978年
- 外林大作 他 編 心理学辞典, 誠信書房 1971年
- 津村俊充・山口真人編 人間関係トレーニング—私を育てる教育への人間学的アプローチ, ナカニシヤ出版 1992年
- Susan Faludi; Backlash, The Undeclared War Against American Women, Crown Publishers, New York, 1991
- Gloria Steinem; Revolution From Within, A Book of Self-Esteem, Little, Brown & Co., Boston, 1992
- 伊藤雅子 「意識化の試み—女子大学における女性論授業の現状」
南山短期大学紀要 第12号 pp.143~163, 昭和59年
- 伊藤雅子 「女 — 二十一世紀に向けて」 声 第1368号 pp.22~27, 1994年

資料 1

なごや女性カレッジカリキュラム

女性の自己理解と自己変革にむけて

	時間	学 習 課 題	学 習 内 容
1	4	オリエンテーション 学び方を学ぶ	開会、諸連絡、日程説明、施設見学 自己紹介、学習方法を学ぶ
2	4	私は何者か？(1) 私の中の女性性	自分の中の女性性の点検、女性性をめぐっての 心理的文化的考察
3	4	私は何者か？(2) 私の五感 私の関心事	・五感の気づきの実習 ・自分の関心領域をさぐり領域ごとにグループ をつくる
4	4	私は何者か？(3) 私の価値観 グループ活動に向けて	・コンセンサスの実習 ・グループ活動の計画・立案
5	4	グループの中の私(1) 対人コミュニケーション、コンテンツ とプロセス	・傾聴の実習 ・積極的な聴き方 ・グループ活動をするときに起こることに目を 向ける
6	4	グループの中での私(2) ・グループ活動	・参加と観察 (1) ・プロセスを見る視点 ・グループ活動のまとめ
7	4	グループの中での私(3) リーダーシップ ・グループ活動	・参加と観察 (2) ・フィードバック ・リーダーシップ ・グループ活動のまとめ ・プロセスのまとめ
8	4	全体のまとめ 内からの変革とセルフエスティーム	グループ別発表 まとめー内からの変革 閉会

資料 2

A女子大学女性論授業日程例（半年コース）

1. オリエンテーション
2. 私の女性論 ― 女性論とは
3. 男性性と女性性
4. 私の中の女性性
5. 私の価値観 I
6. 私の価値観 II
7. 女性のライフサイクル I
8. 女性としつけ・教育 ― 自己形成史を書きながら
9. 女性と家庭 ― 異文化の女性たち
10. 女性と労働 ― 能力開発の可能性
11. 女性と社会 ― さわやかな自己主張のために
12. まとめ ― 内からの自己変革に向けて